

サ
ン
プ
ル

「――ただ。北の海域で、若い血が流された」

深く、どこまでも蒼い光に満ちた珊瑚宮さんじきゆうの広間に、低く響く男の声が落ちた。

そこは、太陽の光が届かない海底都市。

巨大な枝珊瑚が複雑に入り組み、まるで城塞のようにそびえ立つその場所で、一人の人魚が険しい表情を浮かべていた。

名前をオルカという。

しなやかで強靱な上半身は引き締まった筋肉に覆われ、日に焼けたような健康的な褐色の肌には、海の戦士の証である蒼い文様が刻まれている。

腰から下は、光の角度によって瑠璃色から深紅へと揺らめく美しい尾びれに変化しており、その圧倒的な存在感だけでも彼がただの人魚ではないことが知れた。

オルカはこの珊瑚宮の「戦士長」を務める、群れ随一の武人である。

硬派で、曲がったことが大嫌い。

仲間からは絶大な信頼を寄せられ、同時に「オルカに睨まれたら、どんな荒くれ者も直立不動になる」と恐れられるほどの厳格さを持っていた。

勇猛で責任感が強く、群れの安全を脅かすものには一切の妥協を許さない。

日々の鍛錬を怠らず、戦士たちの模範として生きる彼の存在こそが、この海底都市の平穩を支える最大の盾だった。

「オルカ様、負傷者の手当てが終わりました。ですが……深手の者が多く、若い者の中には恐怖で震えている者もいます」

副官である小柄な人魚の女性が、青ざめた顔でオルカに歩み寄る。

オルカは微かに眉をひそめ、頑強な腕を組んだ。

引き絞られた筋肉が硬質な美しさを描く。

「人間の仕業だな」

「はい……。ここ最近、陸の者たちが魔術の網や、未知の黒い鉄球を使って我々の領域を荒らしています。海の資源を根こそぎ奪い、邪魔立てする者は容赦なく殺害していると……」

「許しがたいな」

オルカの低く唸るような声には、抑えきれない怒りが滲んでいた。

彼は尾びれを強く一振りさせ、足元の珊瑚の床を蹴る。

海流が渦巻き、彼の周りの水がピリピリと帯電したかのような緊張感を帯びた。

「海は我ら海原の民の故郷だ。そこを土足で荒らし、仲間を傷つけるなど断じて許されることではない。……一体、人間どもは何を考えている。これ以上、奴らに好き勝手をさせておくわけにはいかない。海の秩序を乱す者には、我が拳をもって鉄槌を下すのみだ」

「しかし、オルカ様！ 人間たちの持つ『魔力』は、我々の鱗をも焼き払うほど強力だと聞きます。それに、陸の上は奴らの領域です。深海を出ることは、あまりにも危険すぎます！」

副官の必死の制止を聞きながらも、オルカの黄金色の瞳は揺るぎない決意に満ちていた。

「危険だからと言って、仲間が血を流しているのを見捨てておけるか。そんなことをすれば、私の誇りがすたる。戦士長として、私が直接あの陸の者どものアジトへ赴き、これ以上手出しをせぬよう警告してくる」

「そんな、お一人でなど——！」

「私の強さを疑うか？」

オルカが鋭い視線を向けると、副官はそれ以上言葉を紡げなくなった。

圧倒的な氣魄きはくと、群れを愛するがゆえの真っ直ぐな正義感。
オルカの背中中は、いつだって頼もしく、そして気高かった。

しかし、その揺るぎない正義感と硬派なまでの誇りこそが、彼を待ち受ける残酷で甘美な罠への切符であることに、この時のオルカはまだ気づいていなかった。

（待ってろ、人間ども。お前たちの野望をここで断ち切ってやる……）

オルカは群れの者たちの見守る中、単身で北の海域、陸との境界線である浅瀬へと向けて、漆黒の海を猛然と泳ぎ出したのだった。

海面を突き抜けたオルカは、波飛沫を散らしながら、険しい崖に囲まれた人間の港町へと上陸した。

人間たちの住む陸地は、常に乾燥した空気がまとわりつき、息をするのさえ喉が焼けるような不快感があった。

だが、そんな環境の悪さなどオルカの怒りにかかれば取るに足らなかった。

濡れた褐色の肌が月夜の光を弾き、引き締まった胸板が荒い息づかいに合わせて大きく上下する。

尾を器用に引きずりながら、彼は人間どもの拠点である巨大な石造りの要塞へとまっすぐに足を進めた。

「出てこい、人間！」

オルカの低くよく通る声が、静まり返った港町の夜気を震わせた。

手に武器はない。

だが、彼の放つ殺気と圧倒的な存在感だけで、警備の兵士たちは一歩も動けず、ただ恐怖に青ざめて武器を落とした。

——だが、それはすべて計算づくだった。

「おや、よくぞおいでくださいました。海の戦士長さん」

冷やかかで、どこか艶を含んだ声が石の回廊に響いた。

闇の中から姿を現したのは、銀糸のような髪を緩く束ね、深紅のローブを纏った一人の男だった。

名前をセシルという。

整った顔立ちは冷徹な美しさを漂わせ、細い眼鏡の奥にあるサファイア色の瞳には、底知れぬ狂気と歓喜の光が宿っていた。

セシルこそが、この海域一帯で禁忌の魔術を操り、人魚たちを狩り続けている張本人だった。

オルカは警戒を露わにし、黄金色の瞳を鋭く光らせた。

「お前がこの町の元凶か。部下を使い、我が群れを荒らした罪、その命で償ってもらう」

「ふっ……威勢がいいですね。流星は数々の仲間を率いる誇り高い戦士だ」

セシルはふつと薄笑いを浮かべ、右腕をゆっくりと持ち上げた。

その腕は布に覆われているが、不自然に硬直し、微かに黒い魔力がまとわりついている。

布の隙間からは、関節が噛み合う不穏な駆動音とともに、黒鉄の異形な指先が覗いていた。

「覚えていますか？ 数年前、あなたの群れの生息域の近くで、海洋生物の神経をすり潰して『永遠の若さ』を得るための禁忌の実験を行っていた者のことを」

「……貴様か。あの時、我が群れを率いてお前の研究所を木端微塵に破壊し、その醜い野望を踏みにじったな」

オルカが堂々と胸を張って告げると、セシルの瞳の色が一瞬で陰しく歪んだ。

「ええ、よくぞ覚えていてくれました。おかげで私の右腕は魔術の反動で腐り落ち、研究は水泡に帰し、私は人間社会から嘲笑の的となった。……なんとか、この異形の腕を繋ぎ止め、こうして動かす術は手に入れましたが。あの時の屈辱、あの海の底で味わった絶望感……どれほどの日数を、あなたへの復讐だけに捧げたことか」

セシルが指をパチンと鳴らした瞬間、周囲の空気が激しく震えた。

ガシャン、と重い音を立てて、オルカの足元や周囲の石畳から無数の「魔導の枷^{かせ}」が飛び出し、一斉に彼の両腕と美しい尾びれへと噛みついた。

「なっ……!?!」

オルカは即座に筋肉を引き絞り、その拘束を引きちぎろうと暴れたが、全身に流し込まれた特殊な鎮静魔術が力を急速に奪っていく。

「ぐっ……これは……っ！」

「無駄ですよ。この港町そのものが、あなたを生け捕りにするためだけに作られた巨大な魔導陣なのだから。あなたが単身で乗り込んでくることまで、すべて計算に入れていましたよ」

崩れ落ちたオルカを、セシルは冷徹な笑みを浮かべながら見下ろした。

セシルのブーツのつま先が、オルカの顎を容赦なく無理やり持ち上げる。

オルカは歯をくいしばり、血走った眼光でセシルを睨みつけた。

「卑怯な罠を使わなければ、私一人すら抑えられぬ弱者め……！ 殺すなら殺せ！」

その気高く、最後まで屈しないオルカの眼差しを受けた瞬間、セシルの胸の奥で、ぞつとするような熱い衝動がうねりを上げて爆発した。

復讐の目的が達成されたはずなのに、セシルの心臓は別の欲望——いや、もっとドロドロとした狂気で激しく脈打っていた。

「殺す？ そんなもつたいない真似をするのですか……」

セシルは歪んだ笑みを深め、オルカの濡れた頬を冷たい指でなぞった。

「その強がりをも、その鉄のような誇りを、私の手で完全にへし折ってあげましょう。海の底の王様気取りのあなたが、私の足元でメスのように喘ぎ、泣き叫ぶ姿を見るのが――これからの私の愉しみだ」

意識が薄れゆく中、オルカはセシルの纏う底知れぬ狂気の気配を感じ取り、全身の鱗が逆立つような強い恐怖と怒りを覚えた。

ひんやりとした地下牢の床に投げ出されてもお、オルカの背筋はピンと伸びていた。

冷酷な魔力によって全身の力を封じられ、身動き一つ取れない状態であるにもかかわらず、その黄金色の瞳には折れることのない闘志が宿っている。

「卑怯な人間め……。くだらない畏に頼らなければ私一人も捕らえられないとは、お前の實力はその程度のものか。何をする気か知らないが、仲間を傷つけた貴様らの思い通りになど、決してならない！」

吐き捨てるようなオルカの声は、冷たい石壁に反響し、微かに震えながらも圧倒的な気概を放っていた。

雑魚であれば恐怖で縮み上がるところだが、目の前に立つセシルは、むしろその罵声を浴びて陶醉したように細い目を細めていた。

「素晴らしい……」

セシルの胸の中で、どす黒く、しかし熱を帯びた感情がうねりを上げて膨れ上がる。

かつて自分の研究を踏みにじり、この右腕を使い物にならなくした男。

その彼が今、敗者として足元に転がっている。

普通であれば、ここで無残に処刑するか、あるいは肉体を細切れにして実験材料にするところだ。

だが、セシルの中で、復讐という目的は一瞬にして塗り替えられていた。

この鉄のように硬い誇りを、自分の手でドロドロに溶かしてみたい。

海の底で群れを率い、誰よりも気高く生きてきたこの「雄」を、あられもない姿で自分にす

がりつかせる――。

命令に背くことなど許されない、ただの自分の快楽の玩具へと仕立て上げ、その美しい声で自分の名前しか叫べなくしてやりたい。

そんな、底なしの独占欲とサディスティックな歓喜がセシルの全身を駆け巡った。

セシルはゆっくりと膝をつき、冷たい手でオルカの顎を力強く掴み上げた。

「殺す、ですか？ さっきも言いましたが、そんなもつたいない真似をするわけがないでしょう」

「……っ、離せ！」

「惜しいですね、オルカ。あなたのその男前で、微塵も怯えを含まない瞳が、私をひどく昂ぶらせる。群れを守る戦士長として誇らしく生き延びてきたあなたを、私の愛と快楽だけで狂わせたら……一体、どんな面白い鳴き声をあげるのでしょうか」

セシルが指先に魔力を込めると、オルカの顎の皮膚がピリリと痺れ、身体の内から奇妙な熱が這い上がってきた。

「なっ、なんだ……この熱は……!!」

「これからですよ。あなたのその強がり、どれほど簡単に崩れ去るか。その頑丈なプライドを、私の手で一つ残らず汚して、私なしでは息もできなくしてあげますから」

底知れぬ狂気を孕んだセシルの微笑みを見た瞬間、オルカの背筋に生まれて初めての恐怖が走った。

命を奪われる恐怖ではない。

それよりもはるかに悍ましく、男としての尊厳を根底から踏みにじられる予感が、オルカの全身の鱗を逆立たせた。

「ふざけるな……!! 離せ、触るなっ……!!」

必死に身を振るオルカを無視して、セシルは狂おしいほどの独占欲を瞳に宿し、その耳元に冷たく甘い声を囁き落とした。

「さあ、海の猛獣さん。陸の快楽の恐ろしさを、その身でたっぷりと教えてあげましょうね」

暗く冷たい地下実験室の床に、オルカは無残に押し倒されていた。

強化された魔導の枷で石の床に固定され、一ミリたりとも動かすことができない。

その視線の先で、セシルは冷徹な光を湛えた瞳を細め、円形の複雑な魔導陣が描かれた床の中央に立っていた。

「さあ、お遊びはここまでです。海の底でしか生きられない肉体を、完全に陸仕様へ書き換えてあげましょう」

セシルが呪文を紡ぎ始めた瞬間、実験室の空気が激しく澱み、床に描かれた陣が血のように赤く輝き出した。

次の瞬間——オルカの全身を、脳髓を焼き尽くすような激痛が襲った。

「ぐっ……あ、ああああ——っ！！！！」

これまでの人生で味わったどんな傷よりも、どんな戦いの痛みよりも強烈な激痛だった。オルカの誇りである、強靱で美しい尾びれ。

群れを率いて荒波を切り裂いてきた、誇り高きルビーとサファイア色の鱗が覆う肉体が、内

側から激しく沸騰するように熱を帯び、引き裂かれていく。

骨がミシミシと音を立てて碎け、新しい肉体へと組み替えられる。

魚のものだった器官が消滅し、人間としての生々しい骨格と皮膚が無理やり形作られていく。その苦痛は、言葉にするのもおぞましいほどだった。

「ひっ……、はっ……あ……!」

どんな痛みにも歯を食いしばってきたオルカだったが、あまりの激痛に声にならない悲鳴を漏らし、目を見開いたまま全身を激しく痙攣させた。

冷や汗が全身から噴き出し、褐色の肌はみるみるうちに青白くなっていく。

自分の肉体が自分の意志とは無関係に変質させられていく恐怖が、精神を容赦なくすり潰していく。

「どうですか、オルカ？ あなたの美しい尾が、泥臭い人間の足に変わっていく感触は。……ほら、自分の足で立てるようになる痛みだ、しっかり味わいなさい」

セシルの冷酷な声が、底から聞こえるようだった。

やがて、尾びれ感覚が完全に消え去り、その代わりに床に投げ出されたのは、あまりにも頼りなく、無防備な二本の「人間の足」だった。

かつて海原を自由に泳いでいた戦士の証は跡形もなく消え去り、そこにあったのは、ただの無力で滑らかな人間の肉体だった。

「はあ、はあ……っ、この……足……っ……」

オルカは新しい足の先を痛々しく震わせ、信じられないものを見るように自分の下半身を見つめた。

新しく形作られたばかりの二本の足は、自分の体重を支えることすらままならず、床に立たされたオルカの膝はガクガクと情けなく震えていた。

尾びれを奪われたという絶望と、未完成な肉体の痛みに耐えかねて身じろぎするオルカの背後から、セシルが音もなく歩み寄る。

「立てますか？ 海の戦士長さん。……まあ、すぐに立っていることすらできなくなりますけれどね」

「ふざ……るな、こんな足……っ！」

オルカが歯を食いしばり、よろめきながらも振り返って拳を振り上げようとした瞬間、セシルは冷徹な笑みを浮かべたまま、その無防備な身体を背後から容赦なく床へと組み敷いた。硬い石の床に背中を打ち付けられたオルカの身体が、ビクリと大きく跳ねる。

人魚の生態には、地上のような剥き出しの性感帯や、外側に垂れ下がる男性器という概念は存在しない。

彼らにとつての生殖はもつと本能的で、このような執拗な快楽を目的としたものではなかった。

だからこそ、セシルが這わせた冷たい指先がその真新しい急所に触れた瞬間、オルカの脳内で何かが激しく弾けた。

「あつ……！？ やめろ……っ！ 触るな、そんなところ……っ！」

聞いたこともない、情けなく掠れた喘ぎ声が喉から零れ落ちる。

セシルは冷酷な甘さを響かせながら、抵抗するオルカの両腕を片手で頭上にねじ上げ、完全に自由を奪った。

太い手首を押し潰すような強い力に、オルカは全身の筋肉を硬化させて抗おうとする。

だが、いくら海の戦士として全身の筋肉を鍛え上げようと、新しく作られたばかりの生殖器やその周辺の粘膜などは、鍛錬のしようなどハナから存在しない。

もう片方の手が、怯えて小さくなったオルカの男性器を容赦なく握りしめ、親指の腹で敏感すぎる先端の切れ目をグリグリと執拗に押し潰した。

「ひっ、あ……あっ、くっ……！ はな、せ……っ！」

「どれほど鍛え抜いた肉体でも、ここは鍛えようがありませんからね。海の底の魚には一生分からない、極上の世界を教えてあげましょう。これが、人間として生きるということだ」

人魚の生で一度も経験したことのない、狂おしい刺激。

剥き出しの薄い皮と神経の束に直接触れられるような感触は、僅かな圧迫だけで肉体をオーバーヒートさせるに十分だった。

人魚として過ごした年月には絶対に存在しなかった、脳を直接灼くような熱い痺れが腰の奥から背脊へと駆け上がる。

抵抗も意味をなさず、未知の快楽で肉体がガクガクと見苦しく痙攣した。

「っ、ふざけ……るな……こんなもので、私が……屈するか……っ！」

気高さを保とうと死に物狂いで睨みつけるオルカに対し、セシルは心底楽しそうに冷笑を浮かべた。

絡みつく手つきは、さらにいやらしく、ねっとりとしたものへと変わる。

体温を吸い上げるような冷やややかな指先が、生え際から先端にかけて弱点を逃さず撫で上げ、先端の最も敏感な部分を擦り込むように捏ね回した。

カリ首の溝に爪の先がわずかにかかるたび、背中が弓なりに大きく反り上がる。